

# 第一三五話

## 頼光朝臣狡童子誅戮事

『前太平記』下 卷第二十一 二一頁から二三頁より

〔頼信、頼光を饗応す〕

同年四月上旬、頼光朝臣は任期が満了して九州から上洛したが、長い間都にいらっしやらなかったために、公私共に用事が多く、あちらこちらとお勤めに行かれ、用事などが終わって、四月七日、弟の頼信朝臣の方から「今日もてなそう」と言っ  
て、お招きがあった次第で、すぐにその御邸宅にお入りになる。中門 (老) の側にある  
既に、童の姿の恐ろしげな者を縛り付けていた。何者であろうかと気がかりに、  
席におつきになってから事情をお尋ねになったところ、「そのことです。今回鞍馬

「其事にて候。 今度鞍馬山に

山に参詣しましたところ、こういうことで捕まえています。いかにも仏教に対する

詣で侍りしに、

云々の事にて搦め得て候。

尤も、仏法の寇、

賊徒、朝廷の敵であると言っても、また追討の宣旨は受けていなかったが、このよ

王道の敵たりと云へども、

未だ追伐の宣旨は蒙らざりしか共、

うに思いがけずに生け捕りましたために、ともかくも縛っておいているのです」。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

斯く不慮に虜り候ひし程に、

先づ搦め置きたるにて候」

頼光が仰ったことには、「あの者は比叡山にいて、大寺でも持て余した者と聞いた

「彼は比叡山に在りて、一山にもてあつかい兼ねし者と聞きつるなり。

のだ。血気盛んな癖者であるので、きっと縄が緩くては間違いがあるだろう。厳し

強盛の癖者なれば、

縄緩くては僻事ありなん。

く縛りなさい」と言ったところ、頼信朝臣は、確かにと同意して、すぐに鉄の鎖で

密しく繋ぎ給へ」

強く縛った。鬼同丸は、苦しみの辛さに、「これは頼光のせいである」と、心に強

く考えて座っていた。こうして色々のもてなし、何度も酌み交わされる盃に、客

斯くて種々の饗応、

数多の献酌に、

人・主人共に戯れて夜も深く更けたので、今夜この御邸宅に泊まった。兄弟は多く

賓主共に入興ありて、夜も痛く更ければ、

今夜は此御館にぞ宿し給ひける。

連枝余多

おられた中でも、（頼光・頼信は）特に親密で、何事につけても分け隔てなくいつ

坐せし中にも、

殊に睦まじくて、

万隔てなく常に往向い給ふ。

も行き来なさる。明日は鞍馬に参詣なさろうと、前々から決意されたので、四天王

の連中も今夜からこの御邸宅にお招きになられた。

## 【鬼同丸逃ぐ】

こうしていたところに、鬼同丸はどうやって抜け出したのだろうか、あれほどきつく縛った鉄の鎖を引きちぎって、屋根の上へのぼり、打ち壊して、こっそり天井に入り、頼光朝臣の寝所の上に忍び込んで、寝つきなざるのを待ち座った。頼光朝臣は（癖者が潜んでいることが）早くもお心に通って感じなされたので、「誰かいるか。この屋根に怪しい者がいる。急いで見てみろ」と仰ったところ、四天王の連中は、「承知した」と言って、我先にと押し合いへし合い騒ぎ立てた。鬼同丸はこの音に驚き、「時が悪かった」と思い、また抜け出していった。

## 【頼光、鬼同丸を退治す】

やがて夜が明けたところ、頼光朝臣は四天王をお連れして、鞍馬に参詣なさり、市原野<sup>(貳)</sup>をお通りになる時に、牧場の牛たちが多く群がり、草を食べ遊ぶなどして、それぞれが心のままに走り回ったのを見て、お供の若者たちが、「さあ牛追物<sup>(参)</sup>で（あの牛たちを）射て気晴らしがしたい」など（の話を）渡部が聞いて、「馬鹿げたことをしないでください。（今は）御参詣の道中、汚らわしい」と言っ

「嗚呼の事仕給ひそ。

御物詣での道すがら、 汚らはし」

て制止した。こうしたところに、多くの牛の中で死んでいる牛がいたのを、渡部が何気なく見ていたところ、確かに死んでいる牛が、時々動くように見えたので、不

審に思い、馬をじっと十分注意して見るが、どうしても理解しがたく思えたので、

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵／<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

自分の心の疑念も（あるのだろうか）と、さらに目を離さずずっと見て座っていたが、何にしても腑に落ちなかったので、「ええい、訳の分からない不審な者のよう

「えゝ由なき不審ごさめれ。

だな。先程皆さんに汚らわしいと制止したとしても、怪しいものを見ながら、その

以前人々に、 汚らはしきと制したりとて、 奇しきを見ながら、

状態で見過ごす理由はない」と言って、弓と矢を持って来させ、さっと番え、よく

さて止むべき様なし」 とて、 弓と矢を取り寄せ、 打ち番ひ、 能つ

引き、びゅんと放つ。その矢は、その死んでいる牛の大きな腹に、矢羽がびったり

引き、 丁と放つ。 其矢、 彼死したる牛の太腹に、 羽ぶくらせめ

と立ったところ、この牛はむくりと起き上がり、立つように見えたが、腹の中から

立つたりしに、 此牛むくと起き上がり、 立つぞと見へしが、 腹の中より

鬼同丸がすっと出現して、「簡単に見破られたことの残念さよ」と騒いで、頼光を

鬼同、つと現れ出で、 「輒くも見現されし事の、口惜しさよ」 と匍つて、 頼光を

目掛けて走り向かう。四天王の面々は、「それ癖者だ」と駆け寄り邪魔したが、潜

目懸けて走せ向かう。 四天王の面々、 「驚破、癖者よ」と、駆け隔て駆け隔てたりけれ共、

り抜け（頼光に）近づいて、（頼光を）馬からお引きずり下ろそうと飛びかかる

掻い抜け掻い抜け近付きて、

馬より引き下ろし進らせんと飛び懸かるを、

が、頼光は少しもお慌てにならず、太刀を抜いて横様に払い切ると、（鬼同丸の）

頼光些とも騒ぎ給はず、

太刀を抜ひて薙ぎ給へば、

首はあっけなく落ちてしまった。体は依然として倒れず、手を広げ走り回るのを

首はあえなく落ちにけり。

質は尚も倒れず、

手を攤げ走せ廻るを、

（見た）、四天王の皆さんは、「このような滅多にない癖者を、このままにしてお

四天王の人々、

「斯かる希代の癖者を、

此儘に捨て置かば、

くならば、どのような妨げをするだろうか、ただズタズタに斬ってしまえ」と言っ

何なる障礙をか為さんずれば、

唯分々に斬れや」とて、

て、首も体もバラバラにして捨てたのだった。

首も軀も微塵にしてこそ棄てたりけれ。

そもそも、剣を取って一人を相手に対峙することは、激しい気質のため、匹夫の勇であると言っても、このような緊急事態に直面して、太刀打ちできる名人でいらっしやらないと、頼光のご自身も危なかったはずだが、あれほどの狡童も一瞬で倒されてしまった。ともかくも知恵と武勇を兼ね備えた良い武将だと、世の人はこそぞって褒め称えた。

---

## 注釈

※壺・中門……寝殿造りの表門と寝殿の間の長廊下の中を切りとおして開いた門。

※式・市原野……京都市左京区中西部の地名。

※参・牛追物……牛を放して追いかけて馬上から射ること。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m( )m

公開：2021/6/7  
海熊童子